

機関番号：34506
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20520718
 研究課題名（和文） 都市空間における住民組織・活動の「コミュニティ戦略」についての文化人類学的研究
 研究課題名（英文） Anthropological Study on “the Community Strategy” of Residents’ Organizations in an Urban Area

研究代表者
 西川 麦子（Nishikawa Mugiko）
 甲南大学・文学部・教授
 研究者番号：20251910

研究成果の概要（和文）：

ロンドン、ハマースミスでの住民組織調査からは、地域活動の基盤が、集団や地域への帰属意識や共同性、近隣住民の対面的な関係にはなく、インターネットなどをおとした地域をめぐる情報と人とをつなぐネットワークと個人の選択と自発性にあること、また住民のあいだに情報格差があることが見いだされた。一部の住民の関心を、目的を明示した諸活動（防犯、落書き消し、街路樹育成など）の実践へ結びつけ、その成果を地域に還元することにより、人々の意識と景観のなかに地域が創造されていく過程を、事例研究をとおして明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

The activities of residents’ organization in Hammersmith, London are based on its rich information network about the local communities via internet and individual choice and autonomy concerned with area, rather than on a sense of identification or cooperation with groups or community. The various projects in the area (anti-crime activity, graffiti clean up project, tree project, etc) are bringing community identity to the participants. These problem-solving, outcome-expressive active style gives impression to the more residents and motivation to make local communities in the area. On the other hand, the gap generated by the information network among resident is found out.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：都市空間、地域、住民組織・活動、情報ネットワーク、コミュニティ戦略、ジェントリフィケーション、実地調査

1. 研究開始当初の背景

多様な人々が集まり移動する都市空間において、家族や対面的な地縁関係をこえた、

しかしそこで暮らす地域や場所に根ざした住民のつながりや住民組織の生成、運営は可能だろうか。世界の都市がかかえる地域社会

の問題を、住民の転出入と階層の移動が大きい、国際都市ロンドンでの実地調査から具体的に考えていきたい、というのが本研究を始めた動機である。

なお、この研究は2004～07年度科学研究費補助金基盤研究C「都市空間における地域コミュニティ形成の可能性についての文化人類学的研究」を発展的に継続したものである。また、研究代表者は2001年から調査地域における参与観察を行っており、本研究は、2007年までの調査で見いだされた次のような研究課題にもとづく。つまり、ジェントリフィケーション（都心部へより裕福な住民が転入し、住民構成がワーキングクラスからミドルクラスへと変わっていく）と住民の経済的階層の二極化（低所得者層と富裕層）が進行する地域のなかで、経済的階層意識が、住民組織・運営にどのように影響しているのか、という問題である。

2. 研究の目的

住民の移動率が高く、世帯間の経済的格差が見られる都市空間において、地域に根ざした住民組織の運営、活動の動向と可能性を、住民側からの主体的な取り組みの戦略に着目して、実地調査から考察することが本研究の目的である。研究課題名にある「コミュニティ戦略」とは、行政のコミュニティ施策や諸団体の活動家が唱えるコミュニティ開発の理念や理論をさすのではなく、住民が、外部資金の獲得など、自分たちの組織や活動の存続のために評価主義や競争原理をいったん引き受け、しかし、そこからは見落とされがちな多様な個人の内面的な問題や、住民どうしの確執などをふまえた、地域の現場の葛藤のなかから生まれる、住民組織・運営の取り組み方である。

とくに、同じ地域のなかで、他の経済的階層やエスニック・グループにたいする、「我々」とは違うという意識が住民組織、活動のなかにもどのように現われ、住民がそれをどう受けとめ対処していくのかをとらえる。

3. 研究の方法

1) 現地調査の対象、期間

調査地域は、ロンドン北西部、ハマースミス&フラム自治区の旧グローブ区（Grove Ward）である。Wardとは、自治区を構成する末端の行政区画であり、2002年5月に行政区画が改変され Grove Ward という名称および区画は失われたが、本研究が扱う住民組織は旧グローブ区を地理的な範囲としている。後述する住民組織 BRA のニューズレターの配布数などから推定して世帯数は3000ほどである。

調査の対象となった住民組織は、1973年に設立され今日まで存続しているコミュニティ・センター（Grove Neighbourhood Centre : GNC）と同地域に1999年に結成され会員制の住民組織（Brackenburg Resident Association : BRA）である（いずれも Charitable Organization）。GNCは、設立当時には貧困区であった住民の生活改善とネイバーフッド・カンシルをとおした地域づくりをめざしたものであった。一方 BRA は、1990年代以降のミドルクラスの住民が増えるなかで結成された情報交換と地域の環境保全、コミュニティ意識の生成、地域の活性化などをめざしたものであり、Eメールをとおして地域に関する詳細な情報が会員へ届けられる。

イギリスで実地調査を行った期間は、2008年8月5日～9月11日、2009年8月4日～9月10日、2011年2月12日～2月28日である。また、日本においても、インターネットとEメールをとおして現地からの情報をえた。

2) 参与観察、ドキュメント調査

研究代表者の西川は、2001年から GNC の活動にボランティアとして関わり、2002年からは運営委員となり、今日に至るまで GNC の参与観察を継続している。地域での低所得者層や高齢者が多く利用してきた GNC の調査をふまえたうえで、本研究では、GNC の利用者とは会員層が異なる住民組織である BRA に調査研究の焦点をあてている。西川は、2005年より BRA の会員となり、日本においても常時、BRA からの情報をメールで受け取った。また、訪英中は、BRA が主催するイベントに参加し運営委員から話を伺うなど取材を行った。

また、ハマースミスの住民組織は、隣接するノッティング・ヒルの1960年代のコミュニティ活動の影響を受けていることが、調査の過程で明らかになっていった。今日の住民組織、活動のルーツを探るため、1960年代のノッティング・ヒルの社会運動にかかわるドキュメント（ミニコミ、フライヤー、ポスター、議事録、地方新聞など）を、North Kensington & Chelsea Central Library で閲覧、収集した。また、ドキュメント収集とともに、1960年代の社会運動の活動家たちを訪ね歩き、当時の“コミュニティ”活動についての取材を行った。

4. 研究成果

ロンドン、ハマースミスにおける10年にわたる現地調査のなかで見えてきたのは、隣近所の住民が互いの名前や存在を認識しているわけでも、特定の地区や集団への愛着や

帰属意識を共有しているわけでもない地域の現状であった。暮らしのなかで「コミュニティなるもの」を実体として共有できない状況のなかで、誰にとっても馴染みがあり多様な意味をもつ「コミュニティ」という言葉が、住民への呼びかけ組織を運営していくうえで重要となっている、という点を本研究では、まず確認した。

1) BRA とは／名称、目的

2009 年度～2011 年度における現地調査で焦点をあてたのは、ジェントリフィケーションがすすむ地域において、1990 年代以降転入してきた比較的裕福な住民たちが中心となって 1999 年に結成した会員・会費制の BRA (Brackenburg Resident Association) である。アソシエーションの名称になっている「ブラッケンベリー」とは、この地域の物件を扱う不動産が、生活に必要な機能をコンパクトに備え人々が行き交う都市のなかの古き良きヴィレッジという地域イメージを売り出すために旧グローブ区に「ブラッケンベリー・ビレッジ」という名称を用いたのが始まりである。これが住民組織の名称としても採用され、ブラッケンベリー・レジデント・アソシエーションとなった。BRA が活動を行う地域を、下記では旧グローブ区あるいはブラッケンベリー・エリアと記す。

BRA は、住みよい環境づくりとコミュニティ精神 (Community Sprit) を育むことを目的としている。ニューズレターの発行 (年 3 回) や毎週数回にわたる E メールでの通信をとおして、地域の多彩な情報を会員や地域住民に届け、地区内の防犯 (Neighbourhood Watching)、落書き消し、街路樹育成など地域に密着した活動を行っている。

毎年会員数を増やし、2001 年には 210 名だったが、2009 年現在では 445 名の会員を擁するようになった。その一方で BRA を「ミドルクラスの権益を守るための活動だ」ととらえ批判的にみる住民もいる。比較的新しい住民組織 BRA は、住民組織運営においてどのような特色があり、BRA の活動の何が、より多くの住民を惹きつけ、また一部の住民にとっての違和感をもたらしたのだろうか。

2) BRA の組織運営、活動の特色

①個人の選択

旧グローブ区に住む住民であれば、誰でも加入できる。年会費£3 を支払う以外に会員としての義務はない。自分たちの暮らしと地域に関わる問題を、そこに住む当事者として自発的に考え行動することが基本となっている。BRA の運営委員会の役員は、毎年の年次総会で選出される。

②充実した情報提供

会員は年に 3 回のニューズレターが配布され、週に数回の E メールによる地域情報が届けられる。(行政の開発計画の動向、住民集会の案内、警察の近隣地区安全チームからの情報、地域で生じた事件、防犯への呼びかけ、地域の店舗、劇場、住民組織などのイベント情報、住民個人からのメッセージ)

③実践的、戦略的活動

会員からの要望や関心を、目的が明確な地域づくりのプロジェクトとして組み立て、助成金を得ながら活動を展開し、その成果を、目に見えるかたちで地域に還元する。地域づくりの活動として本研究が目にしたのは下記の 3 つの活動である。

3) 「地域」を創造する活動プロジェクト

① 防犯活動と近隣意識の育成

「ネイバーフッド・ワッチ」と呼ばれるストリートの住民が地域の警察と連携して行う防犯の取り組みである。BRA 設立当時から行われてきた。近所の人々が互いの暮らしや住宅に注意を払い、住民の監視の目が行き届いていることによって、犯罪が生じにくい環境をつくる。近隣で起きた不審な出来事や問題に気づけば住民は警察と連絡をとり、事件の速やかな解決をはかる。またストリートの代表が互いに情報を交換し地域全体の治安に取り組む。行政や警察からの情報だけでなく、BRA から会員へ防犯や犯罪、事件に関する情報が随時に届けられることによって、隣近所や地域に注意を向けるようになり、防犯というテーマが広い層の住民の関心をよび、ストリートや隣近所を認識するひとつのきっかけとなっている。

②落書き一掃プロジェクト／地域のバリア

これは、地域からグラフィティを一掃するプロジェクトであり、2004 年から始まった。挑戦的に新たな落書き行為が重ねられるたびに、住民たちがそれらを直ちに消していくことによって、この地域では落書きという行為を認めないという意志を強く示し、地方自治体との取り組みとも連携しながら、2006 年には、ブラッケンベリー・エリア内には、グラフィティがほとんど見られなくなった。目に見えないバリアを張り巡らし落書きという行為を阻止し、グラフィティがない街という成果によって、ブラッケンベリー・エリアと住民組織の存在を顕在化させた。

③街路樹プロジェクト／地域を育む

ブラッケンベリー・エリアに街路樹を育て増やす、地方自治体と連携した取り組みである。行政が募集した街路樹管理人 (新たに植

林する街路樹の育成、注水作業などを担当する)にBRAの会員たちが組織的に参加し、地域の街路樹を増やしていった。街路樹プロジェクトでは、住民が協力して地域の樹木を育て街並の緑化に貢献した。プロジェクトの成果とBRAの関係者や参加者の交流と地域のつながりを、緑化という誰にでも目に見えるかたちで象徴し、ブラックンベリー・エリアにたいする愛着や住民意識を育てている。2009年にはロンドン市長による街路樹プログラムの助成金を獲得した。

4) BRA への批判を生み出す背景

個人の選択と自発性を基軸としたBRAという住民組織が、地域社会創りに広く貢献しながらも、地域の非会員である住民からは、時にはミドルクラスの利益を代表する団体の活動であると批判されることがあるのはなぜか。地域づくりの難しさを示す3つの要素が関連していると考えられる。

① 情報の共有と格差

BRAの活動の基盤となっているのは、地域をめぐる豊かな情報網である。情報が住民をつなぎ、人々の関心を引き出し、行動へと動機づけ、地域にたいする意識を生み出していく。しかし、それは、その情報のネットワークに連なる人々のあいだでの地域のリアリティであり、情報へアクセスする手段をもたない、情報を共有しない住民は蚊帳の外におかれ、BRAの活動は、自分たちの利益ばかり追求している、かのように映る。

② 活動成果が与える強い印象

BRAは地域の情報を丁寧に集め問題化するだけでなく、各課題の解決に向けて実践的に取り組み、目的、方法、成果を明確にしたプロジェクトを企画する。その成果は、地域から落書きが消え、街路樹が増えていくなど、誰の目にも見える形で残される。各プロジェクトの参加者は、数10名の少数精鋭の活動であるが、対外的にはBRAという看板をとおして印象づけられる。BRAの会員ではない、とくに旧住民にとっては、地域の多数を占めるようになったミドルクラスの住民層による集団的な力の行使と警戒される。

③ “コミュニティ”像

BRAへのステレオタイプ化された批評の背景には、ミドルクラスとコミュニティは相容れないという住民のあいだでの先入観が垣間見られる。つまり、「コミュニティとは互助の精神にもとづき、多くの資産を所有しない人々こそが、助け合い支え合う真のコミュニティを築くことができる。資産を持つ人々は、コミュニティよりも自己の利益を優先させる」

5) 地域コミュニティの可能性

旧住民のあいだに見られるミドルクラスやBRAへの批判は、地域の住民のあいだの亀裂を深くしていくのだろうか。情報網を充実させ課題と成果を明確にするBRAの活動スタイルは、異なる経済的階層や新旧住民のあいだの距離感を残しながらも、他の住民組織に受け入れられ、今後は、多くの組織や団体の地域での連携がすすむと私は考えている。調査地域の多くの住民組織は、GNCを含め、行政や民間諸団体からの助成金を獲得して運営されている。外部から理解される成果がなければ資金を得ることができない。評価主義や競争原理をいったん引き受けたうえで、組織の理念や方針にたちかえり、活動を組み立てざるをえない。そこでは情報から孤立した組織は生き残れない。他の住民組織との差異化をはかりながらも、異なる組織、団体が連携し情報を交換し協力して活動をすすめ、個人が選択するさまざまな住民の活動の場として地域が幾重に重なり、開かれかたちで存在しているのではないだろうか。

BRAの調査をとおして出会った人々の多くは、一代目のミドルクラスであり、自分で築いてきた人生への自負心とともに、移ろいやすい社会、経済状況への不安もいだいている。かつてあった(かもしれない)ストリートの住民が声をかけ合い関わり合うコミュニティ像にどこか憧れ、情報のネットワークを基盤としたBRAの戦略的な活動に手応えを感じながらも、本来のコミュニティとは何か違う、という感覚ももっている。時には、コミュニティとは親和性が薄いとみなされる新興のミドルクラスの住民こそが、現代の都市において自分が依拠する場所と関係を求めているのではないか。「コミュニティ」とは実体がなくても、希求されるものとして、経済的階層にたいする意識の溝をまたぎ、人々をつなぐ心理的、かつ戦略的な言葉である。

研究成果として、下記に示した論文：西川2009を英訳して、これをもとに、2010年調査では現地のBRA関係者と議論しながら不明な点を確認、新たな情報を収集した。これが論文西川2010である。また、ロンドンでの地域調査の過程や方法は、西川2011年に、調査法テキストの事例として詳細を示した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計2件)

① Mugiko Nishikawa,
Creation of “Community” for Residents’ Activities in Hammersmith, London: Residents’ Association Based on Information Network and Individual

Choice, 甲南大学紀要 文学編 No.160,
2010, pp.179-197、査読無し

②西川麦子、ロンドン、ハマースミスにおける住民の活動の場としての地域の創出：情報のネットワークと個人の選択を基盤としたレジデント・アソシエーション。甲南大学紀要文学編 156、2009、pp.145-176、査読無し

〔図書〕（計1件）

①西川麦子、ミネルヴァ書房、『フィールドワーク探求術—気づきのプロセス、伝えるチカラ』、2011、171頁（とくに本研究と関わるのは、事例編5「街を歩いて資料探索—情報の窓口を知る」、6「取材を始める—系統だてないインタビュー」、7「コミュニケーションツールとしてのビデオ・カメラ」、概論編13「関係と距離—人と人、情報とをつなぐ」）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西川 麦子 (NISHIKAWA MUGIKO)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：20251010